

笹川記念保健協力財団 奨学金支援

助成番号：2018B1-003

(西暦)

2019年 2月 13日

公益財団法人 笹川記念保健協力財団

会長 喜多悦子 殿

2018年度奨学金支援

完了報告書

標記について、下記の通り完了報告書を添付し提出いたします。

記

進学先 山形大学大学院 医学系研究科 看護学専攻 博士前期課程
臨床看護学分野 成人・老年看護学（急性期）領域

氏名 浅野志保

笹川記念保健協力財団 2018 年度 奨学金支援（国内） 完了報告書

山形大学大学院医学系研究科看護学専攻博士前期課程 2 年次における学びは、修士論文の研究が大部分を占める。以下に、修士論文の要旨を示し、論文は別に送付する。

修士論文題目：がん末期の妻を看取った高齢期男性の新たな日常性構築プロセス

1. 研究目的

妻に先立たれた高齢期男性の場合、状況の変化に適応し生活を再構築することは残りの人生を生きていく上での重要課題である。しかしながらがん末期の妻を看取った高齢期男性に対しどのような支援が適切なのか明確ではないため支援体制を構築するための基礎資料が必要と考える。本研究では夫婦のみの世帯でがん末期の妻を看取った高齢期男性が新たな日常性を構築していくプロセスを明らかにする。

2. 研究方法

対象者は A 病院緩和ケア病棟でがん末期の妻を看取り後 5 ヶ月～2 年経過した 60～70 歳代の男性で、死別前は夫婦二人暮らしであった者 10 名とした。調査期間は 2018 年 1 月～8 月とし、半構成的面接法によるデータ収集を実施した。データは修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチに基づき分析した。本研究は、山形大学医学部および A 病院倫理審査委員会の倫理審査を受け、承認を得てから実施した。

3. 結果および考察

面接データを分析した結果、4 カテゴリー、4 サブカテゴリー、20 概念が生成された。本文中では【 】はカテゴリー、[] はサブカテゴリーを示した。< > は概念を示し、“ ” はデータ内の言葉や表現そのものを概念とする in-vivo 概念に使用した。

- 1) 夫婦のみの世帯でがん末期の妻を看取った高齢期男性の新たな日常性構築プロセスには、【死別認識】、【生活立て直し行動】、【周囲との関係性】、何十年と生きてきた中で獲得してきた【もてる資源】があった。
- 2) 【死別認識】は【生活立て直し行動】と【周囲との関係性】の移行に影響していた。対象者は死別後の生活開始当初、[生活変化へ直面] しながらも<長年のスタイル維持>を糧に過ごしていた。長年の生活で得た【もてる資源】や<区切りとしての葬送儀礼>を経て、妻にできるだけことはしてあげられ<“納得できた”>と死別を捉え、[試行錯誤] しながら自分なりの生活を模索していた。さらに残りの人生をいかに生きるかと<命の儚さ>を考えることで【生活立て直し行動】は将来を見据え [ペースを掴む] 行動へと変化した。死別直後は [内にこもる] ことで【周囲との関係性】を保っていたが<長年のスタイル維持>を貫きながら、徐々に<隙間を埋める支え>への感謝や<区切りとしての葬送儀礼>により、元々存在した<安心できる居場所の気

づき>が得られるようになった。そして周囲の人々との<持ちつ持たれつ>のフラットな関係性構築>ができるようになった。

- 3) 日常性構築滞りの場合は、<湧き上がる悔いと悲しみ>が強く、<長年のスタイル維持>の価値観に固持し【もてる資源】が充足しておらず、[生活変化へ直面]している時間が長く [内にこもる] 状態が続いていた。

以上のことから、高齢期男性にとって<“納得できた”>と思える看取り、【もてる資源】への着眼、<区切りとしての葬送儀礼>や<長年のスタイル維持>の価値観を尊重した関わりが、日常性構築プロセスにおいて重要と示唆された。

研究結果は、学位論文審査に合格後、国内の学会にて発表するとともに、学術雑誌への投稿を予定している。

最後になりましたが、奨学金支援を賜りましたことにより、就学に専念し修士論文の執筆に注力することができました。心から御礼申し上げます。この学びを臨床に還元し、多くの患者さん、ご家族に貢献できるよう、今後も努めて参りたいと考えておりますので、変わらぬご支援ご鞭撻を頂戴できますと幸甚です。